明治三十一年十二月廿六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十五年五月一日發行（毎月二回〔一日、十五日〕發行）

仮原藩

教政時報

第七十八號

目次

社說
勞働問題……文學士 有馬祐政
論說
佛教界の二大要件……安藤鐵腸
還俗論……青樹憲勇
選擧民に望む……
社會
◎神宮教復活運動◎基督教徒の選擧運動◎佛教徒は眠れり◎選擧法の厲行◎教界彙報◎紛々錄
雜錄
獨乙より……文學士 K F 生
佛教辯士の評判（四）……自稱辯士
信界
佛教は近きに求めよ……齋藤唯信
今昔
本間氏事跡略考……菊池秀言

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

○政教時報第七十七號目次

社說 ◎新聞紙の德義◎伊藤侯の宣言と總選擧
論說 ◎總選擧に對する吾人の所懷（柴田常惠）◎醫師と宗教……（大岡力戈）
社會 ◎滿洲條約◎內務省の訓令◎釋尊降誕會◎眞龍女學校の卒業式◎教界彙報◎紛々錄
雜錄 ◎つまらぬ記（承前）……（劍虹）◎佛教辯士の評判（三）……（白稱辯士）一念の安慰……（稗川生）
信家 ◎前田利家（五）……（百目木劍虹）
令達 ◎會頭久我侯爵巡回日誌

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の儘は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便局金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十五年四月三十日印刷
明治三十五年五月一日發行
發行兼編輯人 百目木智雄
印刷人 南水朝太郎

政教時報

勞働問題

勞働は神聖なりとの觀念を今日の社會より漸く認識さるゝに至りたるは、最も喜ふべき現象なり、然れども此觀念をしてたゝ理想にとゝめ更に實行の時を與ふるなくば、勞働問題の解決は遂に見ること能はざるに至らむ。勞働神聖の語これ何人も異論を挾まざる所なれども、之を事實上に現はすは甚だ困難とせざるべからず。世の社會主義者か勞働問題に關して、富豪者を嘲り、資本家を攻擊して止まざる所以亦此に存せざるなきか。

我邦の勞働者か資本家より全く奴隸の虐待を受け、非常なる壓制を蒙るに拘はらず、唯々諾々、惟命從ふに至りたるは、一に社會制度の不完全に歸せざるべからず、幾百年の習慣因襲より成り來れる此の社會制度を、一朝一夕にして變更するは容易の事にわらざるなり。社會主義者が歐米諸國の勞働問題の發達せる現狀をみて、俄に之を我國に採用せんとして急激なる運動を企つるは、其意氣頗る壯とすべきも、之か爲に社會の秩序を紊し平和を傷るの恐なしとせず、歐洲の歷史に徵せば如何に其始めは慘憺たる悲劇を演したるかを知るに足らむ。

社會主義者或はいはん、今にして勞働問題の解決を見ずんば早晩其悲劇は免れざるべく、これ吾人の過激なる革新を唱道する所以なりと。吾等は社會主義者と全然其觀察を異にするものなり、社會制度の組織を一變するには先づ徐々として其歩武を進ましめざるべからず、激烈なる革新を企て社會の平和を攪亂するに至らば、これ豈決して策の得たるものならむや。

吾等は社會の人か勞働者を目して無智文盲、徒に亂暴狼藉、喧噪を極むるを以て、彼等の眞相なりとの誤解を招かむことを恐るゝものなり、其結果彼等勞働者は社會の擯斥を受け厄介物視され神聖なる勞働者が、同し人間に生れ、同し權利を有しながら、一方より牛馬の如き虐待を受けつゝ一生涯を通して、營々役々、齷齪として遂に社會水平線上に頭を擡くることなきに至らば、勞働者の悲境何の日か救濟するを得む。若し勞働者を誤解することなく滿腔の同情を表して、彼等は柔順なり、服從者なり、眞に可憐なるもの、敎ふべく、導くべきものとして社會に訴へむか、これ眞に勞働者の爲め忠實なる行動と云はざるべからず。一時の快心に出て、極端なる社會主義を皷吹して勞働者を煽動するか如きは、却て社會の同情を失ひ、爲に勞働問題の前途をして益々黑闇々たらしむるもの也。

吾等は今の資本家をして勞働神聖なる觀念を深く腦裏に印象せられんことを望む、乃ち勞働者か日夜孜々吃々、額に汗し

て業務に從ふは、これ神聖なるもの、職業の前には敢て貴賤高下の別あらむ、勞働者に對して相當の報酬を拂ひ、相當の尊敬と保護を與ふるは、資本家か勞働者に對する義務なりと信ずればなり。

次に勞働者自身かそれ自らの職業を卑むの念を去り、專心一意、其職務に忠實なる精神を持し、以て獨立自尊の氣風を養成するに勉むべし、區々の小事に拘泥し資本家を怨み以て社會に其不平を洩すか如きは、斷乎として避けざるべからず。斯くして始めて資本家と勞働者との間に意志の疎隔するなく、二者相融合して互に步調を一にするを得べし。

資本家が私慾を充さん爲め、賃銀を低廉にし、勞働時間を多くして壓制束縛を加ふるの結果、茲に資本家と勞働者の衝突を招き遂に一大紛擾を釀し、延いて社會の平和を攪亂するに至るは、炳然として火を睹るよりも明なり。吾等は謂へらく、此二者の間に介して監視の位置に立つものは政府實に其責を免るべからずと。翻て歐米の文明諸國を見るに、工場法を制定し管に監督するのみならず、勞働者に十分なる保護を與ふるを以て、勞働者は安して其業務に從ふことを得。殊に獨乙强制保險法の如き、國家自ら其費用の三分の一を負担して勞働者を保護するに至ては洵に盡せりといふべし。

從來我政府の處置を見るに漫然として看過し、毫も勞働問題に向て何等の着手したることなく、たゝ第十六議會に申譯的の工場法を提出したるに過ぎず。吾等は我國の資本家か多くの勞働者を峻酷に使役しつゝある狀態を目擊して座ろに一掬同情の涙を濺くを禁ずること能はざるなり。彼等勞働者は二六時中間斷なく勞務に服從すと雖、其得る所の賃銀は纔に一身の糊口を凌くのみ、兒は寒に叫び、妻は飢に迫るの慘狀をみる敢て珍しきにあらず。當局者か資本家のなすまゝに放任して顧みざるに至らば、急激なる社會の革命之によりて萠芽を發するの恐なきにあらざるなり。況や歐米の社會主義を生囓して直に之を我國に行はんとする一種の煽動家あるに於てをや、政府は早く勞働問題の爲め適當の處置をなさゞれば、後日必ず臍を嚙むの悔あらむ。

基督教徒の或一部の人士か、該問題に關し、多少奔走しつゝあるは吾等の多とする所なり、然れとも吾等より見れば、極めて眞面目なる極めて慎重なる態度を以て之に當る人なきが如し、徒に極端なる社會主義を皷吹して放言空論に耽り、彼の花見懇親會を催して勞働者の歡心を買んとするか如き、輕卒の譏は到底免れざるべし。社會の人か同情を表せざる所以全く理なきにあるざる也。爲めに勞働者の權利を保護する勞働組合の如き、又は職工教育の如き、至要なる機關の設立を見るに至らざるは吾人の大に遺憾とする所なり。吾等は他日重ねて稿を續かむ。

近衛公の主唱にかゝる國民同盟會は去月廿七日芝能樂堂にて解散式を擧たり

論說

佛教界の二大要件

有馬祐政

宗教は數年以前より社會一般の要求する所となり、識者學者にして其の教理を論述し其の教則を立案する者輩出するに至り、宗教界は漸く活氣を帶び來れり。今其の由來を考ふるに、日清戰役並に清國事變に依りて、生死の覺悟を希求すると極めて切となり、更に風教の墮落と財政の窘迫とに依りて、人界の無常を感知すると至つて强くなりしこと。之れがために社會は一般に宗教を歡迎することゝなりしなり。次に學者識者の宗教を講說するに至りし所以は、全く彼等が忠慮研究の結果にして、一面においては、到底吾人の智識能力は皆共に有限なること、他面においては、畢竟吾人の志願情慾は却りて無限なることを領解し、此に煩悶懊惱を爲し、自然に宗教的修養を積み累ぬるに至りて、已れも遂に宗教界中の人物と爲り、其の學識と經驗とを以て、從來の宗教の非理非法なる要素、又不正不當なる部分を去りて、其の眞理を發揮し、其の妙處を開顯し、而も且つ時勢に順應し文運に適當ならしめんことに努力することゝなりたるものなるらし。蓋し此くの如きは是れ當然の進路たり行程たるものにして、宗教のためには勿論のこと、國家の爲め、社會のため、率ねて世界人類のために賀すべき現象なりと謂ふべきなり。

宗教の種類や、其の數甚だ多しといへども、佛教は最も國民一般の歡迎する所にして、又識者學者も深く贊成する所なり。單に日本のみならず、歐米諸國にありても、漸く注意を加ふるに至り、公平なる見地に立てる幾多の人士は、古來信奉したる基督教を捨てゝ新來の佛教を取るの狀況を呈し、佛教の前途頗る有望にして、佛光の照耀將に邊際なからんとす。吾人之れを想見して、誠に爽快の情禁ぜざるものあるなり。」

然るに、佛教をして日本は勿論、所く東洋西洋における思想界信仰界の大威力と爲り聖權者と爲るに就いては、單に社會の歡迎學者の贊成のみを以て滿足すべきにあらず依賴すべきにあらず。必ずや大いに自から畫策し、自から施設する所なくんばあるべからざるなり。即ち我が佛教界は其の普及と發達とに對して、當に二大要件を具備すべきものと愚考す。

第一要件、教育事業の完成

第二要件、經濟事業の整頓

即ち是れなり。而も此の二は現今我が佛教界内部の腐敗紊亂を糺正し拯濟するに此の上なき善巧方法にして、換言すれば、當時緊切なる二大要件なると共に、現代にも亦至極適切なる二大要件なりと爲すべきものとす。恰も一個人の成長活動に對しても、將又一切の事物の成功發達に對しても、上に掲げたる事項は常に二大要件なるが如し。其の理由は幾んぞ說明を要せざるはなに明白なり。然れども、其の教育事業は果して如何なるものなるか。其の完成の方法は果して如何なるも

のを可とするか。次に經濟事業に就いても、亦如何なるべきや。其の事業も、亦如何にすべきや。是れ實に大問題なり。是れ實に大問題たるなり。一個人に就いても然り、一家に就いても然り、亦一國に就いても然りとす。是れ古より種種に論究せらるといへども、今に至るまで決せられざるなり、盡くされざるなり。教育家も、政治家も、皆齊しく其の各方面において苦慮しつゝあるなり。宗教家にありても、同じく既に業に煩擾したるものなれども、余は嘗試に卑見を披瀝し私解を陳述し、以て諸君の參考に資せんと欲す。敢て以て此の大問題に對して正に最後の斷案を下したるものなりとは自稱せざるなり。請ふ次號において之れを詳說せん。（未完）

還俗論

（上）

安藤鐵鵬

職業として見れば宗教家ほど割の惡き職業は無るべく、世渡として見れば僧侶ほど詰らぬ世渡はなかるべし、腐敗は獨り宗教界にのみ限らず天下滔々皆腐敗なり、墮落は獨り僧侶社會に止まらず、世間比々皆墮落あり、然るも天下の腐敗は大目に見放され、宗教界の墮落は一々暴露せらる、常人に於ては敢て怪しむに足らざるもの、僧侶に於てしては既に擯斥の價あり而して常人は位階勳級の榮譽を擅にするも宗教家は何等世に出で身を立るの道なし、何ぞ今の世の宗教家を遇する此の如く冷酷なるや、

然れども宗教家は華士族平民の差別の如く其の身に固有するものに非ず、退かんと欲すれば何時にても退かるべく、脫せんと希はゞ何れの場合にても脫せらるべし、怪哉十萬の僧侶社會よりは甚だしき侮蔑と冷遇とを蒙り、悟然其の職に安んずることや、

昔者親鸞、自ら皇下して愚禿と稱しき、今の僧侶は自から皇下せざるも禿たるの實を存せり、涅槃經に曰すや、我涅槃後濁惡之世乃至爾時多有爲飢餓故發心出家如是之人名禿人と彼等が僧侶たり、宗教家たる天人の導師たる天職を全うせんとにはあらず、社會の冷遇に甘んじて戀々去る能はざる者、實にこれが爲めのみ、

由來宗教家は職業にあらず、僧侶は世渡にあらず、宗教家の神聖なる天職を商賈の如く官吏の如く、工手の如く、俳優の如く落語家の如く、心得て名譽勢利の世間と伍せんするが如きは迷妄も亦甚しといふべし、卓然世表に超出して、眼に王侯大人なく、權門富豪なく、平等の大慈を以て世間を救濟せんとするもの豈に宗教家の宗教家たる所以にあらずや、今の世の宗教家を輕んじ、僧侶を侮るも、尙これを責むるに過酷の態度を以てする、蓋し宗教家なる天職を重視し、僧侶なるものゝ責任を輕からず見るの致すところならん、若しそれ宗教家の腐敗を見ること常人の腐敗を見るが如く、僧侶の墜落を責むること常人の墮落を責むるが如くならんか、宗教家なるもの、僧侶なるものは、益々世間に價を墮したるものといふべし、

然れども彼等は其の天職に心付かず、自家職責の天下萬民の人心に關し、如何ばかり重大なるかを覺知せず、漫然として過ぎ、漠然として暮し、只所謂饑餓を免れんがために頭を圓め、衣を墨にす、彼等既に其の根本に於て誤れり、日常彼等が言ふ所、行ふ所、俗よりも俗、塵よりも塵にして、筆紙に上すさへ筆の汚れを覺ゆるものあり、碌碌として年中、檀徒の墓番を爲すものは、未だ進んで甚だしき、罪惡を犯さずと雖、今法然、今親鸞を氣取りて壇上に四辯八音を振ひ、高座に後生の一大事を說くもの、其の各地を巡遊するに當りて、廉耻を破り道義を紊さゞるもの果して若干ぞ、且つ有志家と稱して宗門の內外を橫行し、種々なる山師的事業を企てゝ、世間に迂濶なる老僧連を瞞着するもの日に多きを加ふ、而して之を制裁すべき一宗の要路に在る人々も固と是れ洞穴の貉、僧風日に頹廢して、寺門の紀綱今は全く地に墜ちんとす、憂宗の志士たまゝ出でゝ之を掃蕩せんとするも畢竟功なく匕を投げて手を引き、强き者は憤然教界を蹴て獨り自から淸うし、弱きものは不平の兒となりて快々樂しまず、此の如くして明治の佛教界は、腐敗に腐敗を重ね、墮落に墮落を增し、今や漸く、精神の救濟を蒙るべき世間俗人より却て精神の救濟を受け、人心指導の大任は事實に於て宗教家以外僧侶以外の人の手に移り去らんとす、

（下）

凡そ天下の事、處を得ざれば即ち破れ、處を得れば則ち成る、惟ふに宗教家の腐敗を極め、僧侶の墮落に陷る、蓋し處を得ざるの致す所以か、見よ今日、宗教家たらんとして宗教家たり、僧侶たらんとして僧侶たるもの若干ぞ、其の多くは皆食はんと欲して宗教家たるもの、飢餓を免れんと欲して僧侶たるもの、換言せば今日の僧界なるものは、無爲無能、頭を圓め、寺院に起臥し、石塔の守護番を勤むるに非ざるよりは飯の食ねぬ呆痴漢の寄り集りなり、而して之に帶ばしむるに人天の導師たる大責任を以てす、抑々無理なる注文ならずや、茲に於て余輩は佛教各宗の爲めに、且つ又十萬僧侶の爲めに、一舉兩得の策を立て、以て十萬僧侶の還俗を促さんとす、

寺院七萬、僧侶十萬といふ、然れども今日の佛教は決して七萬寺院、十萬僧侶の御蔭を蒙り居るものに非ず、若し之れ有りとせば、そは只葬祭追薦の一事のみ、而して此の如きは固と是れ附隨の伴行、還俗の結果、僧侶拂底にして讀經念誦に差支を生ずるに至るとも毫も佛教の消長に關係せず、即ち佛教は僧侶の還俗に依て何等影響の蒙るとあることなし、僧侶も亦然らん、佛教に居ればこそ、些末なることに迄目抉り立てられ、心にもなき窮屈の生活を爲さゞるべからざれ、一度佛教の門戶を出でんか、制裁頓に弛み、殊更に道德振り、殊勝振るの必要も莫く、天下晴れて敗德汚行を敢てするを得ん、是れ佛教より見れば教に不忠實なる商賈主義の無用の長物を逐ふ所以にして、僧侶より見れば不本意なる長者の羈縛を離るゝ所以、豈に一舉兩得の策ならずや、

且つ夫れ人は最も直接なる實際問題に因て奮發りし、勉强

もし、進歩もするおれ、多數の僧侶が無爲無能、最も無氣力なる鉦たゝきと、墓番とに貴重なる人の一生を過さんとするは、抑々無能なるが故に嚙り付き主義を取りたるに非ずして、初めより嚙り付き主義を取りたるが故に無能となれるなり、斯くして漸く社會に立て生存競爭を試みんとの元氣を鎖磨し、退嬰自屈、食ふに困らざる寺院に立て籠りて一生を安樂に過さんとの習慣を爲すに至れり、されば今僧侶を還俗せしむることは、即ち世間見ずの我儘子を他人の間に出すが如きものにして彼等茲に於て初めて直接なる實際問題に逢着し奮勵一番、各々其の職を求めて活動するに至らん、然れば僧侶の還俗は是れ十萬の惰民をして有爲活潑の國民たらしむる國家經濟の一法ともいふべきなり、

此の如くして、佛教は其身を圍繞せる無數のバチルスを排除し、始めて清新健全の身体となりて、其の生命を全うすべく、僧侶もまた積年の因襲を脱して自立の氣象を養ひ、正大公明、獨立獨行の人たるを得べし、由來法は人に因て弘まるといふ、然り、人なくんば法何んぞ弘まらん、然れども人の法を汚すも亦甚し、佛教と僧侶、離るべからざる因緣ありて而かも佛教は僧侶の爲めに汚がされ、僧侶は佛教の爲めに迷惑す、這個の惡緣一日も早く斷絶すべし、以て還俗論を作る、

（完）

選擧民に望む

青樹憲勇

國家を愛するは國民の義務にして、眞理を顯揚するは學者の責任なり、若夫、國民にして國家を愛するの念なく、學者にして眞理の顯揚に力むることなからむか、前者は國家の罪人にして、後者は社會の罪人なり、これ自明の理にして何人も首肯するに躊躇せざるべし。

回顧すれば、維新以後泰西の文物は瀑水直下の勢を以て輸入せられ、物質的文明は駸々乎として長大足の進歩を成すと雖、精神的文明に至りては、前者に比例すべくもあらで、悲雨慘風、反逆の徵候を呈し、道德は蕩然地を拂ふて空しからんとす、蓋是國民の大多數が、個人的、利己的觀念の熾盛にして、國家的、社會的觀念の缺如せる所以にはあらざるか。見よ、帝國々民、五千萬の代表者として、年々歲々日比谷原頭に集まり來る三百の代議士、彼等は帝國々民の代表者として、憲法の成文律に則り、上天皇陛下の御諮詢に奉答し、下萬民の誠意を汲み小心翼々國政を料理する重大なる責任を全うし得るや否や、彼等は果して黄金の爲めに節を賣り、贈賄の爲めに膝を屈するの醜體をあらはすことなきや、政治家の腐敗汚行は世人の已に認知する所敢て吾人の喋々を要せん、代議士の墮落其由りて以て來りし原因果して如何、選擧區民の不注意によるか、或は被選擧者其人の腐敗墮落に基くか、若し不幸にして選擧區民の不注意粗忽より生したる結果たらんには、將に來るべき總選擧に對して深思熟慮を費さゞるべからず。

今選擧てふ名辭の概念を捕捉し以て之を分拆するに、其如何なる場合たるを論せず、二種の觀念より成立せるもの、如し、曰他なし權利と義務即是なり、換言すれは、是に所謂權利とは個人的觀念の産物にして、其所屬團體（社會、國家、會社等諸有集合團體）の一分子として、自己權利の伸張之なり、次に義務とは非個人的觀念（適切の意味にては團體的精神）より生ずるものにして、即團體の一分子として、團體保全の觀念に外ならず、而して吾人の認識にして誤謬なからむか、則ち選擧てふ事實は、正に是れ道德的判斷の對象たるの價値を有する確然たるものなることを、之を帝國議會に繙りて例せば、臣民の代表者を選擧し得る所以のものは、即憲法に定むる所の範圍内に於て、帝國臣民參政の權利（事實に於て）を有する所以なり、此意味に於て權利の主張なりと云ふも敢て不可なきなり、而して同時に他の側面に於ては義務的觀念を有せざる可からず、則ち議院制度の目的とする處は國家の安寧秩序を保全するに外ならず、國利民福を他にして其求むるところ一もあることなしと云ふべし、故に代議士其人の價値如何は、直に國家の消長に連關するものなりと云はざるべからず、於是代議士其人の責任の重大なると共に、選擧人其人の責任の重大なる、亦知るべきなり、故に選擧者たるものは愛國的觀念を以て眞摯事に從はざるべからず、是れ一面は義務的觀念を有せざる可からずと云ふ所以なり。然るに若し選擧者にして其責任を忘却し、盲目的、服從的以て事に從はんか國利民福得て期すべからざるのみならず、延ひて國家の興廢に關する悲劇を演ずるや、火を視るよりも明かなり、愛國の士誰か坐視傍觀對岸の火災視すべけんや、若夫れ選擧人にして國家的觀念なく、輕擧妄動、主義の何たるを問はず人物の如何を論せず、唯目前の小利に眩惑し、國家てふ觀念を外にして、むやみに代表者を選擧したらんには、國家の不幸之れより甚しきはなからむ、吾人が選擧てふ事實は道德的判斷の對象たる價値を有すと前言せし所以なり、

思ふに我國現時の思潮は漸々客觀的傾向を脱し、主觀的方面に向ふて開展せんとするものゝ如し、近來公德問題、信仰問題の喧しきに徵して餘り有りと云ふべし、然りと雖、是僅に一曙光たるに過ぎず、國民思想の潮流全般を擧げて、内界に朝宗せられつゝありやと云ふに決して然らざるなり、道德的思想の幼稚にして而も社會の中樞に位する所謂當世紳士なるもの多くは義務の何たるを知らず、道德てふ概念の欠乏するもの其過半を占むるの狀態なり思ふて茲に至れば豈に撫然たらざるを得んや。

選擧者は此際愼重の態度を以て良代議士を擧けざるべからず、選擧は公權なり私權にあらず、毫も私情を交へず愛憎を加ふるなく、公平の眼孔を以て之に臨まざるべからず、政府は選擧法を厲行すべしといふ、選擧者諸君は幸に新選擧法によりて從來の惡弊を一掃するを得ば實に國家の幸なり、敢て切望す。

社會

神宮教復活運動

神宮教といふ神道の一宗派を更めて、神宮奉齋會とせしは一昨年の事なりしかと記臆す、既に其當時よりして、一派の人々には不平ありしか、近時はこの不平段々持ち上りて、神宮教復活の運動を爲す者ありやに聞き及べり、不平にも種々の理由あるべし、復活運動者の言ひ前にも尤なる點もあるべし、余輩も神宮教を宗教を離れて、單に大神宮を奉齋するに止る團体と組織を更むる當時、一部の人士が廻せる劃策・魂膽内幕等を聊聞き込みしこともあり、隨て他の一部の人士が不平をこぼすも強ち無理とは思はず、然れども何によらず、事物には表裡あり、世の出來事には魂膽も内幕もあり、其間術數も行はるゝを常とするものなり、唯其目的善良にして、其手段も甚しき弊害なきか、又は其事件にして一段落落着して運動も事濟となりたる以上は、之を大目に見ざるべからず、神宮教を神宮奉齋會と改めたるや、其事や甚だ美なり、天照大皇神は我帝國の祖神にして之を崇敬奉齋せざるべからざるは言を俟たず、之を一宗派として見るときは、帝國臣民には信教の自由あり、故に皇祖大神をして單に一宗派の祭神ならしむれば、之を信奉するとせざるとは、吾人の自由にあることゝなれば、最不都合なりと言はざるべからざるなり、去れば余輩の見を以てすれば、神宮奉齋會なる特殊の一團体を形成するすら、皇祖大神を一部の人士に私する如き見ゐあるを好まざるものなり、まして之を宗教として、一の宗派たらしむる如きは全然乖理の所行なりと信ず。神宮教復活運動の如きは、他に如何なる理由の存するにもせよ、余輩の贊する能はざる所なり、

基督教徒の選擧運動

日本福音同盟會にて去月大會を東京に開き、諸種の決議をなしたるか、其中にて今年八月の總選擧に關して左の如き議案を提出し多數を以て可決したりといふ、

本年八月行はるべき衆議院議員選擧に際し我基督教徒も國民として權利義務を行使し憲政の美果を收むるに務めんことを希望す

右の決議に基き東京よりは江原素六、安藤太郎の二氏を擧けて早くも候補者に推定せりといふ、

我政府は僧侶神官にのみ嚴重なる訓令を發して戒飭を加ふと雖、獨り耶蘇教に向て何等の制裁を與へざるは例へ法文の不備とは云ひながら不公平の譏免れざるべし、吾人は基督教徒の選擧運動に對して敢て批難を加へざるなり、彼等が自ら進て如斯議決をなしたる勇氣には驚かざるを得んや、知らず佛教徒は是等の決議を見て如何の感をなすか、

佛教徒は眠れり

今の佛教徒は慥に手の人にあらずして口の人なり、理論は、

正々堂々頗る見上げたるものありと雖、何事も實行するの勇氣なく常に批評家の態度を以て他人の事業に妨害を加ふるが如きは實に忌まゝしき限りなり、少しく政治上に干與すれば、忽ち宗教家の本領に背くものなりとて排斥し、社會事業を唱ふれば、これも宗教家の精神に戻るとて痛く反對し、萬事消極的手段を取りて、積極的に歩を進むることには更に考ふることなし、佛教徒が社會的方面の經營を怠り不知不識眠れる間に外教徒は盛に諸種の事業に着手し教線を擴張すること實に豫想外に出づ、頃日新聞紙上左の雜報を散見せり、一小記事と雖も輕々に看過すべからざるなり、一留岡氏が何の地に癩病患者收容所を設くるも、吾人に於て何等の痛痒を感せざるなり、併し畏れ多くも光明皇后の御遺蹟たる奈良北山十八軒長屋は當時の佛教的貧民救濟事業所たることは、昔より傳へたる所にして、今や此の歴史上由緒ある而も佛教と非常に關係を有する此の御遺蹟は、外教徒の手によりて再興されむとす、讀者諸君請ふ左の記事を讀め

◎北山十八軒長屋の事　光明皇后の御遺跡と稱する奈良北山の十八軒長屋は當時貧民救濟事業として建設されしものにて世人の最も嫌忌する癩病患者を收容したる事跡あるより此程同地に出張したる監獄學校教授留岡幸助氏が深く研究せし結果保存の方法を講じ尚癩病患者收容所とも稱すべき宿舍を建設し洽く世の薄命なる同患者を收容し其身心を慰安せんと欲し有志者も大に之を贊し奮て其計畫に盡力せんことを申出でたりと

選擧法の勵行

政府は來るべき總選擧に對して、他迄選擧法を厲行せんと欲し、訓令又訓令を發して取締を嚴重にするは、大に吾人の意を得たり、政府は徹頭徹尾嚴正中立を守り、賄賂授受の弊を矯正するを得は幾分か腐敗せる政界を救ふに一滴の効なしとせんや、政府果して當初の意志を貫くや否や覺束なきことなり、

教界彙報

◎大谷派の寺務役員と加談會と財政上に於ける意見衝突を來し、其結果加談會の廢止となり、石川四閣は總職となり、新内閣の役割に付て今尚紛擾中なる由、最近の役割を見るに

寺務總長心得　井澤勝治　總務局參務兼上局出仕　堅田勝增
顧問　渥美契縁　會計顧問　小早川鐵僊

其他錄事連に至る迄失〻任命ありたるも、中には固辭するものもありて容易に收まるべく見ゆ

◎淫祠妖教の選擧運動取締　門教會唯に天理教會等の淫祠妖教が總選擧に關係せんとする形跡あるを以て其筋にては大に其弊害を憂ひ取締を一層嚴重にせん方針なるも一の困難なるは僧侶の如きは普通人との區別判然するも是等の教職者に至ては其區別容易ならざるに付地方官に訓令して豫め教職者を調査せしめつゝありといふ

◎淨土宗紀念傳道　本年より十ヶ年後は同宗開祖法然聞光大師七百回忌に相當するを以て同會は紀念傳道を企圖し既に先般各地に會員を分遣して傳道に從事しつゝあり

◎故大谷光澤師の贈位　京都西本願寺先々代の法主にして現法主大谷光尊伯の實父なる故大谷光澤師は維新の際種々の功績ありたるを以て今般其の功を思召され

十月十八日左の如き恩命あり右奉命使として京都府知事大森鐘一墓前へ參向仰付けられたり

贈從二位（特旨を以て位階追贈せらる）

故大谷光澤

◎基督教福音同盟會が大會にて左の議案を提出し波瀾を惹起したりと云ふ

「人と世の救ひの爲め基督を神なりと信ず」

この議案なりを以て、一方にはかゝる明白なる問題は別に決議の必要なしと叫ぶものあれば他の一方には否大に討議の必要ありと絶叫するあり紛々擾々遂に起立を以て決することゝなり議長はこれを起立に問ひたるに左の如き結果になれりといふ

基督を以て神の子となす者　百十人
基督を以て神の子とせざる者　六人
何れにも贊否を表せざる者　卅三人

紛々錄

◎四月四日より廿日迄上野博覽會に特別展覽會がひらかれた、友なる人に誘るゝ親覽に出懸た、われらは素より美術思想もなければ、歴史的頭腦もない、たゞ何かなしに陳列場を一と巡りしたが、多くの人が最も目についたのは、秀吉公の軍扇であつたらしい、これはすばらしいもので、長さ一尺七寸五分、全身黄金つくりで瑠璃、琥珀、眞珠を以て飾り付、光りかゝやき眼もくらむばかりであつた、

◎次は加藤清正の銀の長烏帽子であつた、「甲山籠城の時部下の九鬼四郎兵衛に與へたものであると説明書に書いてあつた、友なる人がこの長烏帽子は着ると存外軽いものであるといはれた

◎一休和尚の筆蹟を始めて見たが、なにとなく和尚の性格其まゝであるやうに思はれた、靈横奏嶽の句で字は極めて拙いやうであつた、弘法大師の筆蹟は見事なもので、二三の僧侶かわきゆもふらす、熱心に眺めて居つた、それは眞言の僧侶であつたらしい

◎應擧の畫は筆力雄健ともいふをかたゝ敬服の外はない、殊に保津川の山水は絶景であつた、是は謝伯一代の名畫であるとの評判である

◎北白川宮御出品の中に、智證大師の戒牒凡そ八卷の卷物が實に珍しく感ぜられた、併し天皇御璽の印、無數に押されたをみて寧ろ貴い感じが起つた、

◎其他貫之、定家、行成卿等の古今名家の和歌、消息等いつれも飽かぬ心地した、陶器類には古色蒼然たるものもあつたらふ、素人のわれらには素よりわない、二時間たらずに陳列場を出て、館内の美術部に居る某君を訪ふたが、もう歸たやうであると、四十位の青男の答てあつた。

◎この間帝國大學の中を通た時、一人の按摩がよせばよいのに、便りをする杖をはなれて人並に酒くとやつて來た、すると先生棒杭につき當りてひどいめにあふた、兎角人間は生意氣なことをすると過ちが多い、慎じべきことである、

◎收賄事件で巢鴨監獄署に服役中なる利光、横山等の醜類は獄衣を着る役割で至極樂であるとの事であるが此の中で中島は經濟書を讀み、利光は心理學と法律書を讀でをるが、後藤は法華信者と見に始終題目を唱へて居るは滑稽にか、長谷川はまたすんと氣取て俳句を捻り此程「一杯の盛禮飯や春の月」「うらゝかや獄衣にとなる樣一つ」と迂鳴たげな、右の事柄は近頃の新聞に出てをつた

◎伊藤想太郎無期徒刑の裁判確定し將に獄に下る時、一詩をかいたそうである

聖澤如天今始知、　捨生取義復奚疑、
揭銘裁獄諄々誨、　恰似參禪發三昧　思一

雜錄

獨乙より

K　F　生

日本ならば明日は寒のあけですから、京都吉田山の疫神參り壬生の地藏のはうらく上げ、江戸龜井戸のうとかひ等なかなかおもしろい事も澤山ありませうし、夜は「疫はらひませう」の聲市町の寒き風にひゝきわたりて、小供のをり「枕はづしいりまへんか」とさはぎまはつた事もおもひ出されませうが、獨逸の都に朝から晩までかた〳〵ころ〳〵と馬のひつめ

のしツクイ打つた街道になりわたり、電車の行かひしげき中を住居といたし、三階の窓から耳鼻もとんでいきさうな寒さをのがいてをりましては、只々暖室爐のぬくみのみがたよりて何の風情もありませぬ、日本は街道は泥にまみれ、ほこりは萬丈の高きにまひのぼり、ひくき家、むさき店どもならんでゐましても、道ひかる迄清く夜も晝とまがふ程の明るさに目をまばゆくし、五階六階の高樓連なる中をうふ〳〵いたし時には「あれ日本人が」「支那人だらう」等とひやかし的にはざかるゝこゝにゐるよりはよろしいです、物のきらびやかさ人のうつくしさは事わけてながめますれば、それはそれはこちらがよいかもしれませぬが、物より心、形よりなさけでやはり日本の方がひいき目になりますよ、家には園なく、出入には一から十迄鍵をかけねばならぬ樣な不自由なせゝこましいところはどうも僕等には氣にくはないです、なるほどこちらには、公園がうつくしくて、ひろくて立派であつて、近角君などは「どうも日本へ歸つたら公園などは見られんじやらう、日本の樣なけちくさい小さな庭はおかしいじやらう」等といつて居ますがこれに付ては一度二人で爭論をして公園の中でトウ〳〵腹を立てたことがあります、これは其筈なのです、こゝいらのやつは自分のうちで園などを見ることも出來ないからです、草木の生々したるものをながめることが出來ないからこんな細工をしよるので、日本の樣にたとひ小さくても一家毎にいさゝかなからも庭を持てゐるものにはそんなくどい面倒な事は無用なのです、御無用でもどうもこれが都のかざりといふものだから何でも公園が必要と相成て、うら寛永寺の寺領をまきあげらうとさわいだり、大風がふき出すとおさき眞暗にごみ立つ日比谷の狸原に大公園をこしらへ樣と云ひをるのです、はては名古屋の樣なところまでこの熱が及んで、何だかどこか公園たる公園か、わけもわからない樣なものをちよつびりこしらへて、やれ名古屋公園でございとさわぎます、いやはや日本人もこゝに至ては頗る滑稽をやりをるのです、僕の考へでは神社佛閣の所在は皆大なる樹木を有し廣き空地を有すれば、これを公園となし一は社寺の收入を考へ、一は衆を樂しますといふ自利利他圓滿の一舉兩得策をやるのが第一だとおもふのです、こゝに至ては京都諸佛寺の所在地、九段靖國神社の如きは最我意を得たものでこれが甚よろしいです、日比谷の原等は大きに不贊成ですよ、さて公園論はまだまだ大議論に至る所かあつて、ちと日本人も顧みねばならぬことがあるがうれはまあよしませう、只一つつけ加へておきたいのはこちらの公園の必要にはもう一ついはく因緣がある、それはまち中がアスペストと云つて悪皆シツクイ詰になつてゐることで、これは馬や車の爲に至極よくもあり又まちを毎日水であらつたり大きな大ブラッシュで掃除をしたりするのに大なる便利があるが、悲しいことには雨がふつてもうはつちを流れてしまふからすぐかはく、車道ばかりがさうでない家と家との間でも人道でもさうだ、依て土地の水蒸氣が上へ上り樣がない、つまり土地から水分をまちの空氣に與へるといふことがない、常に乾き勝の空氣である、そこでそん

な空氣ばかり吸ふてはどうも不愉快だから公園のつちをふんで見ることが必要になりよるのとや、こゝの公園の必要なことは明かでしやう、しかし日本にはこの通りの必要がありますか、ありますまい、うれ御覽なさい、我輩が日本の公園きちがひの誤つてゐるのを論する所以ですどうです感心しましたか、尤も佛蘭西も英國も（一部分は）木切をたてにしきつめて居ますが、これは右の水氣の上る爲には至極うまいが、こいつは修繕に手間がとれるし、またくさるといふこともあるからこゝのところ獨逸の勘定高い先生は多くはやらないのです、とにかく日本東京の道路修理は大急務ですよ、こちらでは夜など街燈が道に反射して居ることがありますからうつくしい、雨がふつてもそんなに靴をよごさない、又馬糞の流れることもない、（よく掃除が出來るから）只馬糞か時〳〵乾ききつて、バット風に立つことはある。しかしまあ金體うつくしいだから、女供がぞろ〳〵〳〵とあの裾を引きずりよつても、そんなに苦がないのと見ゐる（然し其實あの裾は至極むさいもので意氣地のない女はちよつとからげればよいよいものを、だらしなく引ずつてすう〳〵〳〵と馬の糞をさらつていく事がある、まことに恐入る、もう一つ驚くのはあれを着る時には頭からかぶるのだからぞつとしますよこゝに至て毛唐遂にきたなきことを知らぬもの多しと謂ふべしですよ）これはきたない方だが、とにかく道路はきれいで馬車などにのるとうれは心地がよい、少々の雪が降つてもソリを用ひることが出來る小供はすべつて遊びよる　（未完）

佛教辯士の評判（四）

自彌陀士

▲齋藤唯信先生

演說といへば如何なる理屈家も、多少の感情的言語を交ゆるを常とすれども、先生の演說に限ては殆んど感情を交ゆるといふことなく、始より終まで凡て理屈つくめの議論演說に候、然るにも拘はらず滿堂の聽衆をして倦怠の念を生せしめず、肅然耳を傾けしむるは、確かに一種の辯才を有するものと存候、且つ其の朝々の納豆賣にも類する高調子の大聲だけにても、堂に上て睡を貪る懈怠者を警醒するの功は受合に候先生時々滑稽を交ゆることあるも、元來此の種の才なき先生の硬くして堅き舌端はいつも其の意の命するが如くならず、一度も成功せしことこれなく候、持前は持前也、矢張り飽迄嚴肅に、飽迄四角張りて咆哮せられ、なまじか粹を利かせぬ方が先生の爲めに得策と存候、

▲毛利柴庵先生

先生は和歌山縣にての雄辯家なりといふ、昨年來東京に上りて以來、三四回公會の席上にて演說せられ候、その仕振は、宛かも岩を嚙む水の激して奔下するが如き有樣にて、其のすると舌端は能く敵の急所を衝き、寧ろ口きたなきまでに罵倒の言を用ゐられ候、その調子に乘りて辯じ來るや、手を振り、足を動かし、顏をしかめ、言を急にし、而して人に喰てかゝる處宛然惡性の狼の如し、御自身にては勿論熱誠の迸るところなるべけれど、其の言語の餘りにきたなきため、其の

態度の餘りにコセコセせるため、聽くものをして彼れ詭辯を弄して以て樂しむにあらざるかの疑惑を懷かしめ候、書生時代にはそれでも差支はなかるべけれど、大家になられ候時には重みを減すること少からずと存候、今の間に少しく精神の修養をなされては如何に御座候や、

▲上杉文秀先生

先生は才子なるだけ、その演說も中々如才なく候、小兒には小兒の樣に、老人には老人の樣に、婦人には婦人の樣に、而して學者青年にはまたそれに適する樣に、巧に應病與藥の御化導を施され候、其の小兒なり婦人なりに當て雜まるべき巧なる滑稽を用ゐて、自から可笑くもなきに殊更に、アハ〳〵などゝ造り笑ひを爲して見せるところなどは、中々に人心收攬の術に達せられたものに候、さればとて所謂演說道ひの演說にはこれなく、一席の組織には十分骨もあり、肉もあり候、先づ學者中の辯士と言ふも過褒にはこれなかるべくと存候、

信　家

佛教は近に求めよ

不老仙　唯信　口演

佛陀の敎法は我人何れの處に求むべきか我等と釋尊とは其時をいへば三千年を經て處を云へは數千里を隔〳〵て居る直故接佛敎を聽聞すと云ふことは到底あるべき筈のなきは勿論なれども佛陀の入滅已後多數の聖弟子か相集り佛陀の遺法を編纂集錄して後代に傳へし故に多數の黃卷赤軸か殘りて居るその多數の黃卷の赤軸の中に種々の說法か收錄してあるから其に就て求めやうとするか普通のことである換言すれば七千餘卷の藏經に就て求めやうとするのである

然るに佛陀の敎法なるものは只左樣に遠き處のみに求むへきにあらず近く我か四邊を圍繞しつゝある卑近なる事實に就て求むるへきである何となれば佛一代の說法といふは如何なるものかと云ふに佛敎と外道とを見分くる印に三法印と云ふがある其三法印は諸行無常、諸法無我、涅槃寂滅である此の中諸行無常とは諸行は一切萬物でありて此一切萬物は何に一として常住のものはなく必ず生滅變化するもの故賴み少きものであると敎へたものである又諸法無我は此の天地の間にはワレと云ふ常住あるものあることなく皆因緣和合して生し來りしもの故我見我執は起すべきものに非ず若し我見我執を發せば其れよりして貪欲、瞋恚、癡痴等の種々なる妄想顚倒の念を生し流轉せざるべからざるにより無我の見地に住すべしと敎へられたのである又涅槃寂滅は涅槃は圓寂と譯して證りのことである此證りの境遇に至れば一切の妄想顚倒の心やみて寂靜圓滿の大安樂となる故に人たるものは此境遇に到達せさるへからすと敎へられたのである

此三法印なるものは唯た黃卷赤軸の中や寺道場へ參りて始めて知り得へきものでない吾が眼に見るもの耳に聞くもの山

ても河ても草ても木ても一として遷り變らぬものはない爛熳たる櫻花も一陣の疾風に吹かるれは忽ち散り果て皎々たる秋月も一片の雲霧に蔽はるれは忽ち光を失ふに至るか如き是皆無常迅速なることを示すにあらすや闔は是れ主人は是れ客とはこれ古人の語てある家や家敷は火難や水難に遇はされは永く其儘てあるかの如く見ゆれとも其家や家敷に居住せし主人公たる我家の祖先は今何くにか在る父も逝き母も逝き妻も逝き子も逝けるもの世間敢て尠からすこれ即ち人生の無常を示すと共に亦無我の理りを示せしものてはないか此里に親の死したる子は無きか法の風に靡く人なし只親の死せる子あるのみならす子に先き立たれたる親も世間敢て珍らしとせす而も法の風に靡く人の尠きは是れ何たる現象そ畢竟教を遠きに求めて近きに求めさるか故である華嚴宗に託事顯法生解門と云ふことがある此託事顯法生解門に依れは一切の事々物々皆我等に向て深々の法理を示しつゝあると謂ふ釋尊は四門に遊て老病死を見て世の無常を悟り八宗の祖師たる龍樹は同朋の殺害を緣として佛教に入り念佛の元祖たる法然上人は父の横死か緣となりて出家の思を生し眞宗の開祖たる見眞大師は幼にして父母を亡ひ給ひしか緣となりて出家得度せられたてはないかされは黄卷赤軸の中に收むる佛陀の說法と常に我か四邊に圍繞しつゝある卑近の事實とは心して之を觀れは何れも佛法にして若し佛教に死活の二種ありとせは現在我身に向て反省を與へつゝある世間の事實是即ち活佛教と稱すへきか

既に佛教は獨り黄卷赤軸の中に止まらす現に我身を圍繞しつゝある卑近の事實而も是れ活佛教なりとせは我等は佛教を求むるに只之を遠きに求めすして須く之を近きに求むへきなり白雲紅霧涼風清月山巒の奇秀水波の明媚一丘一石一草一木花笑ひ禽歌ふ皆佛法ならさるはなし修道の士大に心を爰に注きき以て精神修養の資とすへきてある

今昔

本間氏事跡略考

菊池秀言

本間氏は羽後國酒田に住す、明和年間より富豪の名顯る我地方寥々古より非常の偉人を出せしを聞す、本間氏の中興を以て名ある光丘の如きは、其性行一に道德宗教の根底より出て、大に家產を興し敦く世道を履み、藩主及土地人民の爲に心身を貢獻して倦す、後世に至て其遺蹟益す好模範となるもの、蓋し有數の傑物にして、現狀の社會を規箴するに足るもの尠なからす、近時雜誌に著述に喧傳激賞する亦由なきにあらす、茲に遺傳中より二三を拾摭して事實を記す。按するに本間氏は舊と越前國に住す、慶長年間本間主計なる者始て酒田に移住す、其系統の係る所、遠く村上源氏より出たりと云時世遼遠且屢劫火の厄に罹り考證するに由なし、現今同家の奉祀して先祖と爲すは本間久四郎を以て初世とす。

本間久四郎名は光源、延寶三年生る、元文五年十一月十八日

死す、潛神院宗丹と曰ふ、人と爲り誠實謹儉深く眞宗の宗義に歸す、家道漸く擧る、播州大阪地方に貿易し閭里の間に知らる。二世本間正五郎名は光壽、元祿五年生る、寶曆四年八月十九日死す、種德院宗旦と曰ふ、父の志を繼き米及金若干を酒井家に獻し、依て廩米七十俵を給せられ、初て年始通行の際謁見を許さる、屢藩用を勤む。三世本間久四郎名は光丘享保十七年生る、三十二歲にして家を襲ふ、酒井家より廩米七十俵を給せらる、郡代に歷陞す、五百石を食む、四十歲にして四郎三郎と改む、享和元年死す、壽七十歲速滿院宗善と言ふ。光丘天資英邁器宇宏遠創業の才に富み、兼て守成の德を全くす、少壯にして家を繼くの翌年より秋作登らす、屢酒田町の困窮者を賑恤す、越て寶曆七年藩主の聞く所となり、十人扶持を給せらる、之を登庸の端緒とす、同十二年九月海岸防護林を築く、凡そ酒田の地に入んとする者、陸路には松丘延袤帶の如く、中に就て鬱翠頭頂の如くなるを認む、海路には渺茫の間蒼顏突出笑ふが如く迎ふるが如くあるを觀る此れ山王陵にして今の日枝社の安ずる所也、抑酒田の地たる南は宮浦に對して最上川に枕し、東は則ち沃野數十里月山鳥海山左右に對峙し、山媚水明に賈舶輻湊洵に東北の巨港なり、而して西北は所謂古昔の砂潟なる者にして、渺茫たる日本海を承け、平沙漠々一草一木の其間に生植するなし、三冬の候北風一たひ起らは細沙欲揚霧の如く聚散して屋舍を傾側し、市中路絕て往來可らす、光丘慨然之を憂ひ此防護に着手す

て數丈の高に達し、長堤數百間の長に及ふ、俄然丘陵を成す最高頂の處に獨力を以て新たに山王祠を創建して稚松數百万株を移植す、初は冬期に至り根露れ枝枯れ十に一二を存す隨て枯れは隨て植、百方術を施して遂に一大防護林となる、是に於て風沙の患頓に止む、他方人民の來遊する者先杖を公園地に曳さるはなし、斯東北の勝區たる風致を永遠に保存し、風沙の災害を悠久に除きたるの功は實に光丘三十二歲の辛苦經營より成就す、林塢最高處に碑あり、文化十三年釋公巖の撰文、淸朝人某の書なり碑曰

松林銘並序

夫酒田之爲地也、南對宮浦、枕最上川、東則原濕衍沃、村落碁布、月峰鳥嶽、左右對峙、羽黑胎藏、廻合數十里外、山水洵美、積粟百萬、賈舶輻輳、富商豪民、莫物不備焉矣、實是北方一都會、但西北之交、遙承北海、相距數十里、平沙漠々、無有寸木尺草、生植其間者、冬間朔風一起、簸揚細沙、雲散霧聚、其所堆積、或施及酒田、乃屋舍傾側、市門路絕、況加以雨雪、其勢不可謂焉、邑民患之久矣、本間家宗善家住酒田、富累巨萬、爲人好善、不啻贍貧恤窮、國家之利、知無不爲、然而、於彼風沙之難、憂無若之何矣、既而大興人徒、使爲蕪沙數百萬、累之積之、高數十尋、長數百間、突然如丘、俄然成山、就其最高頂、遷山王祠、新修堂宇、又植之、以稚松數百萬株、滿山蒼然、如草新生、而每一經冬、根露枝枯、或爲沙所埋、存者十一二、然竭力不已、百方施術、漸及平沙、數年後、竟果成一大松林於是、風沙之患頓止焉、一邑無虞、市人樂業、種麥養蔬者、間就其陰、刈楚刈蕘、以備薪者、時入其中、莫往不利、邑民大喜曰、此是本間君之賜也、則人一過彼林

莫不稱歎其功之速者、嗚呼、雖人一時有赫々之功、而後世其名湮晦不傳、何也、是豈非由無金石記之、以告後者耶、是以、邑人加藤長介、願擇一勝地、建一巨石、昭著其功、以垂諸無窮、一唱之、衆人響應、乃於山王祠上、下其地、戮力合志、經營不日而成、請余爲之銘、余不嫻文字、而以君爲余槎越、義不可辭、因乃作銘曰、

富唯潤屋、德能贍貧、風沙之患、舊擾國人、驟沙功就、松林維新、萬壽無疆、永此施仁、無忠之功、固非眞功、無功之忠、豈是質忠、忠之與功、相濟不空、宜哉爾德、昭著無窮、

文化十三丙子春正月　　釋公巖（以下次號）撰

一金五圓也　　飛驒佛教同盟會

右本會へ御寄附被下候段謹て茲に厚意を表し候也

大日本佛教徒同盟會本部

新刊紹介

文學士　有馬祐政著

◎日本哲學要論　東京　光融館

由來我日本に思想の大產物なし、然れども亞細亞大陸の三大思潮たる儒、佛、道は早く我に傳はりて固有の祖先教と相混和し、爾來既に一千數百年、其間豈多少の變化を生し發達をなさゞらんや、若それ精細に發展の狀態を稽査する如きは極めて興味ありまた有益なる問題なりと雖、豫め攻究の困難と奏効の容易ならざるを期せざるへからず、有馬文學士は實に日本哲學史を專攻するゝ人なり、こたび神儒佛道四教の變遷を序述して本書を著さる、其体裁、菊版無數三百頁、初めに四教の發端を略序し、本論に入りて各別に四教の發達を說明し、次にその評論を試み、結論に至つて「四種哲學は、各相輔け相倚りて每にその短を足しその欠を補ひゆきて、以てその成立を爲し進化を爲し、特に以て發達を致したるもの」なりと結ばれ、簡易流暢なる言文一致体を以て能く云はんと欲する所を云ひ盡し、その要を提へて立論また穩健、著者は謙退して公務の餘暇哲學館にて講ぜし所に過ぎずと云はるゝも、實に近來の好著たるを失はず、中に一体と雖如は時代を異にすとし、金閣寺に老子國字解の著あるを忘れられたる、或は道眞を道實としたる抔二三の錯誤ありと雖、固より本書の價値を損するものにあらず、吾人は造詣なき小册子濫出の際かゝる着實なる著書の出てたるを喜ひ、敢て大方に紹介し特に教育宗教に關かる諸氏の座右に薦む、（定價九十錢）

大須賀秋峯著

◎管公奉佛傳　京都東六條　法藏館

一千年の管公紀念祭は諸方に催ほされ、公の人物を傳する著述頻々として出つ然ども其多くは皆溫厚を說き忠眞を語りて、未だ公をして此に至らしめたる信仰の如何なりしかを云はず、著者即ち筆を起して公が奉佛の事蹟を述べて此著あり、實に時好に適するものと云ふべし、（定價二十錢）

富井隆信著

◎他力のおしへ　仝　上

眞宗所用の正信偈を極めて簡易に言文一致体を以て講話せるものなり、從來此類の書敏て乏しきにあらざれど文字の解釋なきすんば義理に流るゝものゝみ、幸に本書は其弊に陷ぬらず大意を提ふるを忘るゝなく、また其解釋も体裁も一段進歩の狀あり、全体五號活字にて老人にも讀み易し　（定價三十錢）

田島大機著

◎佛教と國家　仝　上

佛教の尊ふべき所以と我國家の佛教に負ふ所多きを說ける書にして、多く歷史的事實を以て之を證明せんとせり、一二史實の錯誤ありと雖ども大に於て好著と云ふべし、（定價十二錢）

富井隆信著

◎佛教渡世談　京都　興教書院

世に對し人に對して人の取るへき道は如何、こは誰人も一度は遭遇すべき大問題なりと雖、從來は之を輕視して充分の注意を拂はざりし所なり、本書は家庭、兄弟、社會等十二章に別ち極めて平易に人の履むへき道を說示せしものにて、社會改良の尊高き時かゝる實際的の著書の世に出るは實に喜ひしきことなり、

北陸巡回日誌は次號に讓る

◎轉居

本郷區眞砂町一七、聚精館　桑門典

◎生儀今般無事歸朝致候此段辱知諸君に謹告す

本會內　近角常觀

一金壹圓也　福井市罹災救恤義金報告（第一回）　萩野氏北堂

一金七拾錢　大木貞壽、岩田タカ、村上ツル、大軒トヨの四氏

一金五錢　有川周次郎殿　一金貳拾五錢　某氏

一金貳拾錢　鈴木セキ殿　（計　貳圓貳拾錢）

福井市罹災救恤義金募集

福井市は古來佛教界の重鎭にして今猶奉佛の信徒常に諸在の寺院に溢れ其の盛況日本國中稀に見る所なり然るに去月三十日祝融氏狂風に乘じて猛威を逞うし僅に數時の間に同市の大半而も樞要なる街區を燒盡し東本願寺別院等寺院三十民家三千五百悉皆烏有と爲り許多の死者傷者を出だし衣食なき者に至りては幾ど算なく其狀筆紙の得て盡くす所にあらず實に近來大慘事と謂ふべし本會之を默視するに忍びず自ら進んで斡旋の任に當り廣く義金を募集して之が救恤の資に充てんと欲し此に讀者諸君の慈心に訴へて善財の寄附を切望す

◎五月十五日限◎五錢以上◎郵劵（五厘一代用不苦◎義捐金は本會宛

四月　大日本佛教徒同盟會

精神界

毎月一回◎定價壹部八錢◎壹年分壹圓二拾錢（郵稅共）

四月十日　（二の四）　發行兼目

東京本郷森川町壹番地二百四拾壹號浩々洞發行

如來の果位及光明　多田鼎

小訓二則　エピグテタス　曉烏敏

服從論　小林雨峰

夜ののろひ　村上專精

鎌倉代の一高僧　青鬼堂

我が即興の詩　澤柳政太郎

偉人論　（精神界）

我が智情意◎靈化　清澤滿之

親鸞聖人誕生會に　（精神界）

ニイチエと我等と　森內政昌

極樂論　（解釋）

如來及び其法　佐々木月樵

宗教觀の三轉進　永井濤江

桃李のむら　楠龍造

他力論　（報道）

東京通信　石川成章

旅人の見たる銚子

政教時報第七十八號　明治三十五年五月一日發行
明治三十一年十二月二十六日遞信省第三種郵便物認可
毎月二回一日十五日發行

前田慧雲
花田凌雲　兩師共著

最新刊

略述眞宗教史

前洋裝總クロース
編金文字入
價金六十五錢
郵稅金八錢

著者、前田師は現時佛學界の泰斗として帝國大學講師として令名隱れなきの人、花田師は新進氣鋭の佛學者『佛教倫理概論』の著者として斯學界に知られたるの人、本書の內容が如何に豐富有益なるかは以て知るべきなり、

本書の目的とするところ主として三件あり一には中等教育教課用書として佛學子弟の誦讀に供し、二には一般讀書界の要求に應じて簡明に眞摯に佛教の內容を知らしめ、三には佛教々義史研究の嚆矢として一般佛學界の氣運を催進するに在り、本書は其第一篇たり。本書の記述は總論三章、眞宗の大旨、三經の大旨、七祖の撰定を論して、眞宗成立の基礎を示し別論七章、龍樹以下眞宗教義發揮の跡を詳にし、且つ一般念佛教史に亘りて馬鳴堅慧諸大士以下、盧山天台等の念佛より、日本に至りては慧隱、智光、を始め鎮山念佛の發展等を叙し、源空上人の紀傳教義に及びて筆を收めたり、僅々三百頁、固より三國念佛史の詳細を盡すべからざるも雖、繁簡其度を誤らず、一目燎然其大躰を曉らしむるに於て憾なきは著者技倆の見るべきあり、されば本書は、佛教々弟の指導として、普通讀者の師友として、而も斯道學者の良參考書として、稀有の良著たるや疑なし、本書は既に東京第一佛教中學、各地佛教中學の教課用書として採擇の榮を得たり、江湖の購讀を待つ

發行所　東京市本郷四丁目　文明堂

賣捌所　京都油小路御前通　興教書院